

<国税庁長官賞>

税金と人々とのつながり

福島市立信夫中学校

3年 渡邊 萌菜

祖父母の家に行く度に、祖父から言われる言葉がある、

「日本は世界で一番の国なんだよ。」

私はいつも、この言葉に疑問を抱いていた。何を根拠に、何に関して日本が一番なのか。続けて祖父は、財布を落としてお金ごと財布が持ち主に返るのは、日本だけだと言った。

では、なぜ日本では落とした財布が持ち主のもとに返ってくるのか。私は、日本人の心と公共サービスの発達が、バランス良く融合しているからではないかと考えた。

落とし物を警察に届け、警察が落とし主を探す。私たちにとって、当たり前のことのように思えるこの一連の流れは、決して「当たり前」などではない。人々の善意と警察の活動とが、結びついて成り立つものだ。この何気ない「当たり前」を支えているのが、税金である。

暮らしの安全を守る警察や消防などの活動や教育、福祉など様々な場面で税金が使われている。私にとって一番身近な税といえば、やはり消費税だ。しかし、私の周りの大人は口々に「増税反対」と言っている。確かに税が上がれば、以前よりも一度の買い物で出すお金が多くなるのは事実。でも私は、増税は自分たちにとって、マイナスな面ばかりではないと思う。

なぜなら、私たちが払った税金は、また自分に返ってくるからだ。整備が行き届いた街や施設、公共サービスの充実は、税金なくしては成立しないものばかり。これらのおかげで、私たちは心豊かに、安心して幸せに暮らすことができる。そして、整った環境

の中で育まれる美しい日本人の心が、世界に誇れる日本の「当たり前」を生み出すのだと思う。

また、昨年私は、福島市が主催するオーストラリアへの海外派遣事業に参加した。何事にも受け身だった私が、この事業を通して広く世界に視野を広げ、グローバルに活躍できる自分になりたいと思うきっかけとなった。

しかし、6月に参加した福島市国際交流協会の総会で、私は驚くべき事実を知った。それは、この海外派遣事業に1千4百万円以上のお金がかかっているということだ。参加者一人が負担したのは1万円だけであるから、多くのお金が税金によって賄われていることになる。つまり、私たち中学生の夢や希望が、たくさんの人々によって支えられていたということだ。私はこの事実を、深く感謝の心を抱くと同時に、日本の将来を担う私たちへ向けられたメッセージのようなものではないかと思った。

私はやっと、祖父の言っていた、日本が世界で一番である理由が理解できた。それは、整った環境の中で養われる日本人の心が、世界のお手本となれる素晴らしいものだからだ。私は、この機会に税を納める意義と日本の担う役割について改めて考えたい。税により創られる明日が、明るいものであるために。